NAGASAKI JUNSHIN CATHOLIC UNIVERSITY

# FD Newsletter

第６号

発行日　2018（平成30）年１月22日

長崎純心大学　教育開発・IR 委員会

〒852-8558　長崎市三ツ山町235番地　TEL095-846-0084　FAX095-849-1894

（巻頭言）
地域包括支援学科の良いところと長崎純心大学の魅力　1

特集：障害学生の理解と支援　2
※障害者差別解消法への対応について

※「障害学生支援実務者育成研修会　基礎プログラム」を受講して　3
※障害学生支援体制の構築にむけて

授業紹介
※環境心理学　4－5
※The Effects of the Internet on our Learners
※「フレッシュマン・セミナーA」での取り組み　－「さるくガイド」のはじめての活用－　6

３ポリシーの実質化を考える－第７回大学コンソーシアム八王子 FD・SD フォーラム報告－　6

海外の大学の授業を考える－学生の留学体験記を通して－　7

2016（平成28）年度教職員 FD 研修会の概要　8

ひといき（コラム）　8

2016（平成28）年度 SD 研修会活動報告（2017年１月実施分）　9

2017（平成29）年度 SD 研修会活動報告（2017年８月実施分）　9

教育開発・IR 委員会活動報告　10

編集後記　10

UNIVERSITY ACCREDITED
2011.4～2018.3
公益財団法人大学基準協会
大学評価適合認証

## 地域包括支援学科の良いところと長崎純心大学の魅力

学事部長　**山田幸子**（地域包括支援学科教授）

先日、一人の高校生から唐突に以下のような質問を受けました。「地域包括支援学科の良いところと長崎純心大学の魅力についてどのように考えておられるか教えてください」と。

私はとっさに「地域包括支援学科の良いところは、障害を持って生活しているたくさんの人達に直に関わって学ぶことができ、また、その方々からたくさん教えてもらえるから、自分の生き方や人間性がとても豊かになるところかな」と応えました。

次に「長崎純心大学の魅力は」と言おうとして、交通の不便さのマイナスイメージが頭をよぎりました。運よくその日は快晴で、遠くに大村湾を見渡せる絶好の日和でした。「この純心大学キャンパスは、今から42年程前に山を開拓して建てられました。創立者は江角ヤス先生とおっしゃるシスターです。校舎が建つと江角先生はこの庭から全体を眺めて『ここがこんなに素晴らしい処とは思ってもみなかった。来てみて、住んでみて、はじめてわかったのね。一日中変化に富んでいる。一年中、様々な情景が見られますもの。神様の御業が見えているのよ』と感嘆しました。さらに、『できるだけ木を残し、自然を残し、土地開発した分は緑にし、花を咲かせましょう。学生が自分の手で花を植え、育てることを憶えていくようにしましょう』と率先して鍬を振い、四季折々いつも花があり、果物が実るようにと木を植えました」今残っているのは調理室の裏の大きな栗の木くらいですが、毎年数キロの栗が収穫できます。

江角先生は、長崎純心大学で学ぶ学生・教職員に「本物の美しさを受け取って、さらに自分の力を加えてごらんなさい。そうすればさらに豊かになるでしょう」と晴れの日も、雨の日も、風の日も、雪の日も自然を通して皆さんに語りかけておられます。

交通の便に関しては、近隣の自治会長さんたちと協働し、４月から新規路線矢上～純心大学～シーボルト校線が開通しました。自治会長さんたちは、「長崎純心大学は地域の灯台ですよ」と言って期待してくださっています。

今年のフレッシュマンフェスタで思い切って「ガーデニングクラブ」を立ち上げました。６名の学生が手を挙げてくれました。さっそく沿道の花壇に花を植えましたが皆さん見て、楽しんでくださっていますか。

# 特集 障害学生の理解と支援

## 障害者差別解消法への対応について

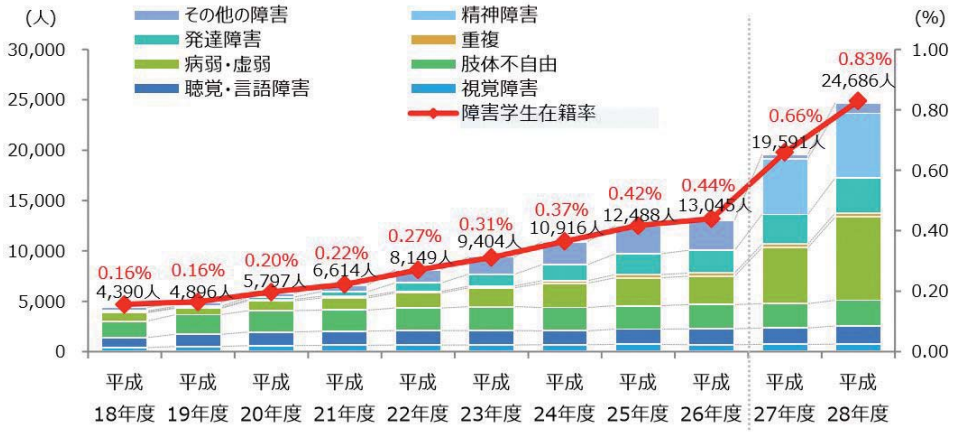
教育開発・IR 委員長
足立 耕平（人間心理学科教授）

2016（平成28）年４月に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）が施行され、障害者への「不当な差別的取り扱いの禁止」がすべての大学で法的義務となり、「合理的配慮の不提供の禁止」は国公立では法的義務、私立大学では努力義務となった。

日本学生支援機構の「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告」によると、平成28年度、大学に在籍する障害学生数は24,686人で、全大学生数の0.83％を占めている。図からわかるように大学に在籍する障害学生数は年々増加している。障害種別では、平成28年度調査において大学に在籍する障害学生数が最も多かった障害種は「病弱・虚弱」であり、次いで「精神障害」、「発達障害」の順となっている。

このような状況を受け、各大学では障害を持つ学生へ対応する体制づくりを進めてきている。筆者は2017（平成29）年６月に開催された大学教育学会第39回に参加したが、この中の「障害学生支援の現状と課題および地域連携の在り方について」というラウンドテーブルで各大学の取り組みが報告されていた。ある大学では、対人関係やコミュニケーション力など、ゼミやグループワークで必要とされる能力に困難さがあることが多い障害学生への修学支援に対して、「障害学生支援室」を設置して対応しているとの報告があった。また、シラバス上に障害を持つ学生への配慮としてどのようなことができるかを書くようにしていることや、アクティブラーニング等、コミュニケーションが必要な科目かどうかもシラバスに記載するようになっており、学生は自分の得意、不得意によって科目を選べるようになっている例が報告されていた。また、地方の複数の大学・機関で障害学生支援のノウハウを共有するシステムを構築し運用を始めている例も紹介されていた。

本学においても今後、障害のある学生に対する具体的な支援・対応手順について体制を整えていくことが求められている。障害学生に関わるのは教員のみならず、入試広報課、教務課、学生支援課、キャリア支援室の職員、そして学生相談室のカウンセラーなど多岐にわたる。また、実習センターや図書館なども障害学生と関りを持つことがあるだろう。2018（平成30）年３月の学内 FD 研修会では「障害学生への理解と支援」というテーマで講演会とシンポジウムを開催する予定である。教職員全体でこのテーマについての課題を共有し、学内の体制づくりを考える機会としたい。




**大学における障害学生数と障害学生在籍率の推移**（日本学生支援機構より許可を得て掲載）

# 「障害学生支援実務者育成研修会 基礎プログラム」を受講して

教務委員長
岩瀬 由佳（児童保育学科准教授）

2017（平成29）年８月28日・29日、大阪に於いて、「障害学生支援実務者育成研修会　基礎プログラム」を受講した。参加の発端は、様々な困難を抱える学生が入学し、本人だけが困り感を持つのではなく、指導している教員や接している職員が対応の難しさを感じていることからだ。また、周囲の学生が、困り感を持つ学生に対してどのように接したらいいか戸惑う場面が感じられるようになっていた。さらに、対応している教職員が疲弊してしまうことに危機感を募らせ、教職員によって様々な対応の違いがあるのではないかという懸念から、支援体制が必要であると感じていた。

プログラム内容は、講義とグループワークであった。講義の中でも、「合理的配慮の考え方」「支援体制」の２点が一番知りたかった内容であり、10年以上前に体制を整えた大学の教員の講義は、感じる部分が大きいものであった。中でも、「支援体制」は、「入学前」「合格後」「在学中」「就職」など、在学中だけではないことに納得した。

グループワークでは、私以外はキャリアや相談窓口の職員やカウンセラーの方々であった。最近では、発達障害がある学生への対応が多く、その場で多く意見が出たのは、何とか大学での学びができたとして、就職はどうするのかということが他大学の大きな悩みであり、就職しても、１年以内に辞めてしまう傾向にあるということであった。

本学は、就職率100％を大きくアピールしている。それであれば、次のようなことが必要ではないかと考える。

・受験する前の段階から、相談窓口を設定し、対応できる配慮を整え、「できないものはできない」と言える体制をつくる。
・入学後には、相談窓口を整え、教職員がそれぞれ抱え込まずに協力し合える体制をつくる。
・就職にあたっては、就職先にも保護者にも、その学生のために話せる場があり、全体的に協力できる体制をつくる。

以上のような大学づくりができれば、障害がある学生ばかりでなく、他の学生、教職員、保護者、地域にも温かい大学になれるのではないかと思う。

皆が安心できる大学づくりのために、考えていかなければならないと思う研修会であった。

# 障害学生支援体制の構築にむけて

永友 貴之（教務課長）

本学で問題になっていることは、他大学でも問題になっている。障害をもつ学生への対応は、すべての大学にとって喫緊の課題である。

障害者差別解消法（平成28年４月）で禁止される２つの差別は、不当な差別的取り扱いと合理的配慮の不提供である。

まず、私たちは、平成18年国連総会における「障害者の権利に関する条約」の採択から始まり、我国における障害者基本法の改正に起因するという障害者施策の流れを踏まえなければならない。つまり、国際的スタンダードな考え方の理解である。

その上で、私たちには、我国の障害学生支援を取り巻く状況の大きな変化に関する情報を提供されることが必要だ。できれば、FD・SD として企画されることが望ましい（既にその計画があると聞いている）。

そして、次のステップへ移るだろうと思う。①合理的配慮の意識の共通化（教職員全体が）②意思決定を行う組織を設置（特定の教職員任せにならない組織横断的なもの）③支援の姿勢・方針の作成（共有される）④ニーズへの対応と支援である。具体的な支援方法となる③から④へは、PDCA サイクルよりは、OODA（Observe/Orient/Decide/Act）サイクルで運用されていくべきだろう。

長崎県内の大学・短大・高専の現在の取り組みにもふれておこうと思う。平成29年９月に障害学生支援情報交換会が長崎県内大学・短期大学等理事長・学長会の承認を得て開催された。日常における支援は、個別的であり多岐に亘るが、オープンキャンパスに専用相談窓口を設ける、公式ウェブサイトで支援方針を公表している、支援方針と支援申請をまとめた冊子を作成している事例もあった。何より、障害学生支援への教職員及び周囲の学生の理解の浸透が共通の課題であることを確認した。

障害学生支援の体制づくりは、私立大学等経常費補助金に係わることでもあり、社会に対するアカウンタビリティの意味をもつ。障害学生支援の確かな理解を基に、本学ができる支援姿勢・方針を明らかにする。支援方法を決定する過程では、授業の到達目標と評価基準を変更するといった誤った判断が行われないよう注意する。そして、支援する側の“支援”体制も同時に構築されるべきだということを指摘しておこうと思う。

# 授業紹介

## 環境心理学

丸山　仁美（人間心理学科准教授）

この講義では、身近な物や場所などに関する環境心理学について学んでいます。この講義の特色は、環境心理学を受け身的に勉強するだけでなく、学生がグループとなり身近な物や場所について環境心理学的なテーマを決め調査を行い、パワーポイントを用いてプレゼンテーションし、その後プレゼンテーションについて他の受講生とディスカッションをすることです。

まずテーマを決めて、調査内容や調査方法についてグループで議論します。このテーマは教員から指定するのではなく、他のグループと重複しない範囲で、学生自身の興味関心で決定しています。テーマは例えば「環境推論」として『飲食店の内装から、その店の客層や金額を推論できるか』を調査する、「ホットスポット」として『長崎市において犯罪が多発する場所に共通する特徴があるか』を調査する、などです。

次に調査した結果をまとめ、パワーポイントを作成します。パワーポイントを作成するのが初めてという学生も多いので、そのサポートもしています。

そしてプレゼンテーションです。現場の写真を撮ってきて考察したり、アンケート調査を実施し集計したり、それぞれ工夫を凝らしたプレゼンテーションです。

調査した結果をまとめ、パワーポイントを作成する様子

プレゼンテーションの様子

プレゼンテーションの一例

〈建物内に見られるアフォーダンス（飲食店）〉

キッズスペースの白い壁

考察

右の写真のように、この飲食店にあるキッズスペースの白い壁は実際は落書きのためのスペースではない。
しかし、キッズスペースが白い壁、またその周りに「壁のデザイン」として絵が描かれているためか、落書き帳があるにも関わらず壁に落書きをする子どもが多い。

そのため、この飲食店のキッズスペースの白い壁は"小さな子どもに落書きをしてよい"行動をアフォードをしており、誤ったアフォーダンスであるといえる。

ここで学生グループの調査プレゼンテーションの一例として、「アフォーダンス」を紹介します。環境心理学でのアフォーダンスとは簡単に言うと、その環境のデザインによって人間の‘ある行動’が多くなる現象のことです。この学生グループの調査は、環境のデザインによって、人々の‘望ましくない行動’を促進させてしまっているという「誤ったアフォーダンス」に着目したものです。様々な現場写真を撮り考察していましたが、その一つ「壁に子どもが落書きをする」という‘望ましくない行動’をアフォードしている飲食店のデザインの問題点を指摘しているというのが左の図です。

このように学生自らが調査・プレゼンテーションをし、他の受講生が質問をしたことに発表者として責任を持って回答することを通して、自らが問題意識を持ち能動的に学習し、知識や考察を深めることを重視した講義となっています。

## The Effects of the Internet on our Learners

Jonathon Platt
（英語情報学科　准教授）

In *Socrates and the Forgetfulness that Comes with Writing,* Egypt's King Thamus, claims that "one man can give birth to the elements of an art, but only another can judge how they can benefit or harm those who will use them." This observation holds today when considering the dramatic effects on our students of the internet in general, and of social networking sites and apps, in particular.

The Internet has changed my life massively since it became 'a thing' towards the end of my undergraduate studies in the late 1990s. I, like most if not all of Junshin's staff members, grew up in an analogue world where we went to the bank to pay bills, walked to the travel agents to book flights and rang the local takeaways at the last minute (in New Zealand) to order a lazy dinner on Friday evenings (perhaps Hoka Hoka Bento in Japan). We scoured the library for hours looking for that one book with the quote we needed for that assignment, photocopied and cut out graphs and tables we needed for our presentations, and wrote directly onto transparent sheets to be used on the OHP for the same.

Today it's possible to pay bills, do shopping, plan holidays and pretty much anything else we would ever want to do from the comfort of our sofas, and when we do decide to venture out to pick up some dinner, we don't even need to talk to someone when we order our take home meals. Research and fact finding that used to take days if not weeks can be done with a quick Google search, clicking a few links, copy, paste and voilà, that final assignment is in the rear view.

Back in BC 399, Socrates was worried about the effects of the development of writing on the minds of learners. He went on to lament that writing "will introduce forgetfulness into the soul of those who learn it: they will not practice using their memory because they will put their trust in writing, which is external and depends on signs that belong to others, instead of trying to remember from the inside, completely on their own." If that's what Socrates thought about the development of writing, it's no wonder that many of us are concerned about the ongoing transitional nature of our modern,

technology infused ways of life. Life today is unrecognisable in many ways from life even 20 years ago, and the rate of change is only increasing.

Effects of the Internet on our Brains

Whether or not you think that the benefits of the internet outweigh the drawbacks, there is no denying that the way we receive most of our information is having a marked effect on our brains. In his book *The Shallows: What the Internet is Doing to our Brains* (Norton, 2011), Nicholas Carr points out that the texts Socrates was so worried about encouraged linear, focused, deep processing as readers engaged with texts. The repeated practice of reading one text at a time develops the ability to focus on a single task, to block out distractions and engage with the ideas in a text. The reader engages with the intended meaning of the writer and the ideas are gradually moved from the short to the long term memory. This kind of deep thinking is becoming harder and harder to master with the ubiquitous use of the Internet as the source of all information. The implications of this for us as teachers are vast.

The Internet, as opposed to books, doesn't encourage deep reading or thinking. Rather it over stimulates our brains and promotes a state of constant multi−tasking. Humans crave new information, and the internet provides a constant source. The constant updating of emails, tweets, Line messages, RSS Feeds and playlists starting and ending incessantly interrupts our thinking to the point where we now crave the next distraction. Basically, our learners have grown up digitally and have different brains to us, literally. We grew up analogue and may notice the changes the Internet has had on our ability to concentrate. Our learners probably don't have another way of thinking to refer back to. Instead they are much more accustomed to processing and juggling the constant streams of stimulation and distraction, but at a price.

As stated earlier, the constant stream of information bytes prevents the movement of information from short to long term memory, explaining why a significant number of our students seem to have trouble remembering much from one lesson to another, or to make connections between content from one day to the next. This situation has been illustrated in many studies (pp. 126-28) where groups of learners were given texts to read, and were then tested on the content of the text. The only difference being one text had a much higher density of hyperlinks. Those who read the texts without the hyperlink retained significantly more than those who read the text without the hyperlinks. The mere presence of hyperlinks distracts readers through the changes in text colors, as they are constantly deciding what and what not to read. If the simple hyperlink can have such an effect on information processing, what about the myriad of other blinking lights and sounds emanating from our learners' and their friends' phones, tablets and webpages?

Basically, the constant stimulation of many of our students from smart phones and the computers they use to do research on means that their (and our?) brains have adapted. Many now crave constant stimulation and a state of perpetual distractedness, which obviously has a negative ability on their ability to process, store, recall, retain and integrate anything more than superficial information. This situation leaves me with more questions than answers. Do we simply accept this as the new normal and adjust learning accordingly, such as with shorter classes? Do we make students aware of this and provide more learner training about how to practice activities that promote attentiveness and deep, focused thinking? My final point would be that learners (and teachers) who can utilize the amazing benefits of the Internet while developing more traditional linear modes of thinking will undoubtedly have a significant advantage over those who are deficient in either mode.

## 要約 インターネットの学習効果について

紀元前399年、ソクラテスは書くという行為が“書くことを学んだ者たちの魂の中へ忘却をもたらす、つまり彼らは、自分の記憶を使おうとせず、執筆したことを信頼するようになり、自分の中にある知識を思い起こさず外から入ってくる文字にゆだねてしまうということ”に嘆き悲しんでいました。インターネットから得られる利益は、その欠点を上回っているとしても、私たちが今、ほとんどの情報を受け取っているその方法により、私たちの脳には劇的な影響が与えられていることは否定できません。

ニコラス・G・カーの著書「ネット・バカ　インターネットがわたしたちの脳にしていること」の中で、著者はソクラテスがとても心配していたにもかかわらず、文字は読者を直線的に集中して深く理解することを助けていることを指摘しています。　一行一行を繰り返し読むことによって、ひとつのことに集中する力を発達させ、気をそらさずに、文中の思想をしっかりと理解する力を伸ばします。　読者は、著者の意図することへの理解を深め、その思想は短期記憶から長期記憶へと次第に移行していきます。このような奥の深い思考力は、インターネットを情報源としていつ、どこでも使用することにより、習得することがますます難しくなっています。

本とは逆の立場にあるインターネットは、深く読み取る力や思考力を高める助けになりません。むしろ、それは私たちの脳を過剰に刺激し、絶え間ない多重タスキング状態を増進させます。生徒達はスマートフォンやコンピューターを使用してリサーチするとき、絶えない刺激を受けており、彼ら（また、私たち）の脳はその状態に順応してしまっています。多くの人々は今、常に一定の刺激や絶え間なく散漫な状態を求めており、それは明らかに、表面上の情報以上に深く理解をする、記憶する、思い出す、保持する、集積する能力に対して否定的な働きをしています。

この状況は、私に答えを与えてくれるのではなく、より多くの疑問を残します。私たちは、ただこれを新しい常識として受け入れ、集中できない生徒達のために授業時間を短くするなどして対応していくのでしょうか？私たちは、生徒達にこの状況を知ってもらい、どのように学習すると深く集中する考え方や記銘力を促進させるのかといった学習指導を提供していくのでしょうか？私たちは、何か行動しなければなりません。なぜなら、インターネットによる利益を利用しつつ、もっと伝統的な直線的思考力を伸ばすことができる学生（また先生）が、どちらの方法も不充分な者よりかなり有利であるからです。

要約　Yukiko Platt

# 「フレッシュマン・セミナーA」での取り組み……

石田　憲一（児童保育学科長）

## ―「さるくガイド」のはじめての活用―

「フレッシュマン・セミナーA」は初年次教育として、全学科１年生を対象とした基礎科目です。この科目のねらいは、『知恵の道を歩み　人と世界に奉仕する』という本学の建学の精神を理解すること。また、自らが生きる地域社会の課題解決に向けて主体的に取り組もうとする姿勢を涵養することです。

この授業では、フィールド・ワークを通して、学生自身が地域の課題について主体的に考えていくことを重視しています。昨年に引き続き今年も長崎市の取り組みと将来へ向けた課題について学生に知ってもらうため、長崎市長田上富久氏に講演をしていただきました。市長が「平和首長会議」について話されているときには、学生たちは「長崎から何ができるのだろうか」ということを真剣に考えながら講演を聞いているように見受けられました。

今年初めての試みとして、「長崎さるくガイド」を活用したフィールド・ワークを実施しました。学生は８～10人程のグループになり、①眼鏡橋から中通りへ②アンゼラスの鐘の丘を訪ねて③長崎はローマだった④二十六聖人の道を歩く⑤原子野の思いをはせて⑥被爆校舎で耳をすませばの６つのコースに分かれ、「長崎さるくガイド」の方から説明をしていただきながら調査をしました。

フィールド・ワーク後、学生たちはグループごとに印象に残ったことや印象深かったことを地図上に表し「オリジナル・マップ」を作成しました。プレゼンテーションでは、この「オリジナル・マップ」について発表し、学びや経験を分かち合いました。

この授業を通して学生たちは、平和の継承、キリスト教と長崎の歴史の理解、伝統文化の継承といった長崎における地域社会の課題に関連させながら、各自の役割について考えていました。

このような経験をした学生が、これから地域の課題に主体的に取り組み、よりよい地域社会を創っていくことを願っています。

# ３ポリシーの実質化を考える

## ―第７回大学コンソーシアム八王子 FD・SD フォーラム報告―

畠　山　　均
（英語情報学科長）

2017（平成29）年８月23日（水）～24日（木）、大学コンソーシアム八王子主催で開催された第７回大学コンソーシアム八王子 FD・SD フォーラム「三つのポリシーとその実質化を考える―教育現場では何が変わるのか―」（東京都八王子市学園都市センターにて）に参加した。

今年のフォーラムでは大学が設定している３つのポリシー（ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー）を実質化することで、大学教育がどのように変わることが期待されているのか、またはどのように変わるのか、あるいは変わらないのかを講師・参加者が共に考える機会となった。全国の大学から教職員・学生並びに教育企業関係者約200名が参加し、２日間にわたり熱い議論が交わされた。

１日目の基調講演では、立命館大学教育開発推進機構の沖裕貴氏、東京大学高大接続研究開発センターの濱中淳子氏、佐賀大学大学院工学系研究科の皆本晃弥氏の３氏が３つのポリシーの意義や経緯、問題点とその明示化方法等について具体例を示しながら講演された。それに続くパネルディスカッションでは、会場の参加者も交え、３つのポリシーの策定及び運用における課題等について、活発な議論が交わされた。

２日目は７つのテーマで分科会が開催されたが私は「高大接続教育・入試改革を支える多面的評価のあり方」と「PBL 等の問題解決型学修における自治体との関わりについて」の２つの分科会に参加した。どちらも実践的なワークショップやパネルディスカッション形式で他の参加者との活発な意見交換の場となった。

様々なテーマについて多くの議論が交わされた２日間であったが、全体を通して本学の現状を考えた時に次の２点が特に重要と考える。

**（１）３ポリシーの実質化**

基調講演でたびたび指摘されたことであるが現在、日本のほとんどの大学で３ポリシーは設定されてはいるが、それらは単に文字として「書かれている」だけであって、その３ポリシーを実質化するように大学教育が行われていない点である。ではその３ポリシーの実質化とは何か、それをどう実現するか。これからの大学教育ではこの課題が問われてくる。本学も例外ではない。

**（２）学習成果の評価**

大学の授業が単に「知識・技能」を教える場から「思考力・判断力・表現力」の養成の場に変わるべきであると言われ出してから久しい。そこで浮かび上がってくる課題はそのような授業での学習成果をどう評価するかである。例えば授業の到達目標の中に「思考力・判断力・表現力」の養成を掲げるなら、それらが学生の中にどの程度養成されたのかをどのように評価するかという課題である。これは３ポリシーとの関連で言うならディプロマポリシーの実質化の問題でもある。なぜなら評価について考える事はその科目、さらにカリキュラム全体、そしてディプロマポリシーとの整合性を考える事である。評価の分科会で強調された「設計なくして評価なし」ということばは重く受け止めるべきである。

本学においても「３ポリシーの実質化」を今後検討していかなくてはならないが、学習成果の「評価」の視点から考え初めてみてはどうかと思う。

# 海外の大学の授業を考える－学生の留学体験記を通して－

滝澤　修身（比較文化学科教授）

本学の比較文化学科、英語情報学科からは毎年、単位互換留学制度を通じ、半年間海外で学ぶ学生がいる。そこには、日本の教育では感じることのできない独特な教育が展開されている。私たち、長崎純心大学の教育を考えるうえでも大切なものとなるので、ドイツに留学した比較文化学科４年生の松薗さくらさん、韓国に留学した英語情報学科３年生の尾田愛香さん、ニュージーランドに留学した英語情報学科３年生の迎祐佳さんの留学体験記を紹介する。

## アイヒシュテットカトリック大学

比較文化学科４年　松薗さくら

私はドイツのアイヒシュテットカトリック大学に短期留学しました。半年間の中で特に記憶に残っているのは、テアーターシュピーレンという授業です。この授業は留学生同士が与えられたシュチュエーションごとにドイツ語で短い劇を作り、ドイツの学生や地域の人々の前で発表するというものでした。留学生同士でも言語レベルに差があり、コミュニケーションを取ることに苦労しましたが、先生も学生も親切で、分からないことは英語とドイツ語を交えながらわかりやすく教えてくれました。この授業で他の留学生と距離を縮めることや会話の練習をすることができました。発表本番ではとても緊張しましたが、とても良い経験になりました。

## 大邱カトリック大学

英語情報学科３年　尾田　愛香

私は、３年生の前期に韓国の大邱カトリック大学へ留学しました。私が留学した韓国の学校で最初に驚いたことは、お昼休みが無いということです。中にはお昼ご飯を食べない人もいたようですが、ほとんどの学生たちは各々で時間を作って食堂へお昼ご飯を食べに行っていました。授業時間も日本のようにほとんどが90分というわけではなく、授業ごとに時間が違いました。私が受けていた授業の中で一番長かった授業は２時間半ありました。

また、授業形式の面でも日本との違いを感じました。韓国の大学は日本の大学よりもパワーポイントを多く使います。私が授業を受けていたほとんどの授業は学生たちが授業前にパワーポイントを作ってくることを課題とし、授業で作ってきたものを発表する、という形式でした。韓国ではこのような教育方法で学生たちのプレゼンテーション能力を高めているようです。

## マッセイ大学

英語情報学科３年　迎　　祐佳

ニュージーランド、マッセイ大学の私が属したコースでは、週ごとにマインドマップを書くことから授業が始まりました。各週に設定されたテーマを中心として、マインドマップを４人１グループで作成します。作成したマインドマップは、クラスの中で発表した後に掲示をします。この際に用いた用語や授業で習う単語は金曜日にテストしました。

また、毎週木曜日にはテーマに沿ったディベートを行ない、金曜日にはそのフィードバックが一人一人に返ってきました。実際にその週で習った知識を駆使して行うディベートは習熟度を図るには適しており、慣れるごとに語学力が身についていることが実感できました。時にクラスメイトから改善した点や改善すべき点を言われることもありました。他人から評価されることは日本ではあまりない体験だったのでとても嬉しかったですし、モチベーションにもなりました。

半年の留学を通して、意見を学習者同士で交換する場面が多く作られていたことは際立って印象的でした。

# 教職員（FD）研修会報告
## －2016（平成28）年度教職員 FD 研修会概要－

教育開発・IR 委員長　足　立　耕　平
（人間心理学科教授）

2017（平成29）年３月13日（月）に2016（平成28）年度長崎純心大学教職員 FD 研修会を開催しました。本年度の研修会は「教育の理念・教育目標の共有」をテーマとして実施しました。

午前は大学基準協会特任研究員・元広島大学教授の生和秀敏先生より「第三期認証評価における大学評価システムの変更について」との演題でご講演いただきました。第三期認証評価では内部質保証システムの構築がより重要視されており、大学が自ら目標を定め主体的に改善に取り組んでいくことが求められるという点が印象に残りました。その後、片岡瑠美子学長より本学のモットーである「知恵のみちを歩み　人と世界に奉仕する」についての講話があり、教職員全員で改めて教育目標を再確認しました。

午後は教育開発委員会が主体となり「教育理念、ディプロマ・ポリシーの整理と目標の共有」というグループワークを行いました。６名程度のグループに分かれ、人文学部および５学科のディプロマ・ポリシー（学位授与方針）を熟読した上で、それぞれが育もうとしている知識やスキルを分類・整理し、教育理念との関連などについてディスカッションをしました。この取り組みを通して、本学が目指している教育目標を具体化し、共有することができたのではないかと思います。

ご講演いただきました生和先生、誠にありがとうございました。ここに記してあらためて感謝の意を表します。

**【参加者の声**（事後アンケートの自由記述より抜粋）**】**

（午前中のプログラムについて）

・新たな動きについて知ることができた。今後の自分自身の取り組みをより具体的に振り返る必要を感じた。
・今回の講演で内部質保証システムを大学で構築することの重要性が良くわかりました。
・大学の評価システムについて話を聞いたことで、シラバスや授業の内容、実践などにおいてすべきことが見えてきた。
・学長のお話をきき、改めて大学のポリシーについて考え直す機会を得ることができました。
・学長による教育理念の話は純心教育の原点に帰って、考えさせられることばかりでした。

（午後のプログラムについて）

・５学科のディプロマ・ポリシーの確認から、大学の教育目標の確認をすることができた。楽しくワークショップを行うことができ、教員・職員との和も図れたのではないかと思われる。
・ディプロマ・ポリシーについて客観的にみる良い機会となりました。
・ディプロマ・ポリシーと教育理念との関係や各学科との関連などが見え、楽しく作業し学ぶことができた。
・他学科との共通点や多様性をもちながら、全体がひとつの方向に向かっていこうとする姿を実感することができました。

ひといき

コラム
## 自分の授業を振り返って

大　杉　あゆみ（地域包括支援学科助教）

このコラムを担当するにあたって、普段の授業のことを振り返り、これまでの「学生による授業アンケート」の結果をよく見てみました。すると、当然のことかもしれませんが、授業の進め方で改善すべきことが具体的に見えてきました。

私は社会福祉の資格に関わる実習や演習系の科目を主に担当しています。実習・演習系の授業では、学生とコミュニケーションを図り、その中で学生の理解を確認しながら進めているように思います。

一方で、講義になると私の場合は、余裕をもって準備ができず、話す内容がしっかり頭に入っていないときは、テキストや資料を見て話すことに集中してしまい、学生の顔を見ていない傾向があります。これは、授業参観に来ていただいた先生からも教えていただいたことです。この科目の「学生による授業アンケート」を確認したところ、「学習に適した環境を保つように努めている」と「教員は学生の積極的な参加を促している」が低い評価になっていました。私が学生の様子に気を配ることができていなこと、学生にとって受け身の授業であるということを表しているなと思いました。そして改めて、学生は見ていないようでしっかり見てくれているのだなということにも気づかされました。

課題は明らかになったので、次は改善です。ここが難しいところですが・・私の場合は、授業の準備を十分にすること、また、自分が話すだけではなく、何かしら学生に働きかけていく工夫をすることです。授業の展開方法や学生への伝え方などを先生方の授業を参観させていただくことで、たくさん吸収していきたいと思っています。

## 2016（平成28）年度 第３回 SD 研修会報告

SD 委員長　岩　﨑　由希子
（図書館情報センター事務室長）

2017（平成29）年１月５日（木）に第３回 SD 研修会を開催しました。テーマは、「純心大学の魅力をこうアピールする～純心のいいところの気づき～」とし、研修内容は、職員を９グループに分け、改めて長崎純心大学の良さは何かについて考え、ブレインストーミングの手法を参考にして討議を行い、その良さを高校生、在校生、地域社会へ向けてのキャッチコピーで表現するという研修でした。

身近にいてもゆっくりと話す機会がない職員同士で、“純心大学の良さ”について向き合い、意見を言葉や文字にすることで再確認し、それらを新たにキャッチコピーとして構成してみる作業は、本学への想いを再認識する機会になりました。

９つのグループに分けたにも関わらず、結果的に本学に対する良いイメージや考え方が似通っていたこと、本学の強みを確認できたこと、全職員でそれを共有できたことが成果だったと思います。

この研修の今後は、“その想いをどう活かしていくのか”、になり、“この大学の良さのアピール”に繋がっていければ、担当した SD 委員会としては幸いです。

**キャッチコピー例**

・地域社会へ向けて
「ここには　地域社会の明日をつくる　純粋な愛と心がある!!」

・高校生へ向けて
「夢を叶える私と出会う　～成長する場所　純心大学～」

**参加者の声**（事後アンケートより抜粋）

・（職員で純心のいいところの）キャッチコピーを作り上げていくところが、むずかしかったですが、大変勉強になりました。
・純心大学について見つめなおすことができるとても良い機会となりました。
・各グループから、純心のいいところがたくさん出て、前へ進もうとする意欲と自信が感じられた。
・いいところを書きだすというのはやってみて気持ちが良いものでした。
・職員が良いと思っている純心生の“素直さ・まじめさ”は、大学全体の雰囲気を作り上げていると実感しました。

## 2017（平成29）年度 第１回 SD 研修会報告

SD 委員　森　　幸　喜
（施設課）

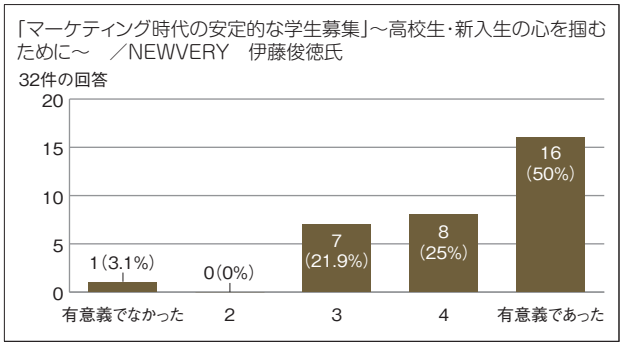
2017年（平成29）８月４日（金）に平成29年度第１回 SD 研修会を開催いたしました。

大学設置基準の改正により、今年度から教職員全員を対象とした SD 研修が義務化され、事務職員だけでなく教員も含めた初の SD 研修会となりました。

午前は、(1)財務状況、(2)大学改革と中長期計画、(3)教務関係：大学運営と教務、(4)厚生補導：学生カードを利用した面談について～初年次教育～、(5)厚生補導：キャリア支援等についての説明、発表があり、大学の現状を共有することができました。

午後は、教員、職員の共通テーマとして、最も重要視しないといけない学生募集について、NPO法人 NEWVERY 高大接続事業部の伊藤俊徳氏より「マーケティング時代の安定的な学生募集～高校生・新入生の心を掴むために～」との演題で講演をいただきました。大学の個性、情報、内容をどう打ち出すか、また個性を教育にどう反映させるか、高校や高校生にどう魅力的にアピールすれば良いのか、何故、マーケティングが必要なのか、その手法や考え方の習得をインプット（講義）だけでなくアウトプットとして、アイスブレイクやいくつかのグループワークを取り入れながら学ぶことが出来ました。厳しい大学経営の環境下にあって、学生の観点から大学に求められる意識と期待が理解でき、本学としての強みと啓発点を共有することができ、今後の指針を感じ得ることができました。

（Google フォーム利用結果）




**参加者の声**（事後アンケートより抜粋）

・ワークショップの内容理解においてついていけていないところがあったが、発表されたグループの意見を聞くことで理解が深まった。このようなワークショップは新年度を迎えるための準備として、毎年実施されるとより現実的な方法で対応できるのではないかと思った。
・学生募集のためには、教育を知ってもらうだけではなくて、知らせ方・対象者……様々な角度から社会状況をみて分析し、学園の特色もそれに合わせて細かく提供していきたいと思いました。そのためにも、柔軟な考え方と行動力が必要だなと感じました。
・具体的な例を挙げての説明で大変わかりやすく参考になりました。これからの業務に生かしていきたいと思います。
・注目されている、質が高い、力を入れているなどの数値では測れない根拠だけでなく、社会の動きをデータ化して、その流れに沿った無駄のない戦略を立てることが必要であることを感じるのと同時に、果たしてその流れに乗れるのかという焦りを覚えました。とても有意義でした。
・新たな視点からの話しでいろいろ勉強になりました。

# 教育開発・IR 委員会活動報告

## 2016（平成28）年度

### ■教育開発委員会

第７回 平成28年11月２日　第８回 平成28年12月14日
第９回 平成29年１月18日　第10回 平成28年２月22日

### ■学生による授業アンケート

後期　平成29年１月23日～２月６日
※教員へフィードバックアンケート実施
集計結果の公開（本学ホームページ）

### ■教職員 FD 研修会

「教育理念・教育目標の共有」10：30～16：00
※教職員へのフィードバックアンケート実施

## 2017（平成29）年度

### ■教育開発・IR 委員会

第１回 平成29年３月22日　第２回 平成29年４月12日
第３回 平成29年５月17日　第４回 平成29年６月７日
第５回 平成29年７月12日　第６回 平成29年９月13日

### ■学生による授業アンケート

前期　平成29年７月20日～８月４日
※教員へのフィードバックアンケート実施
集計結果の公開（本学ホームページ）

### ■教職員による授業参観

前期　平成29年６月５日（月）～６月16日（金）
※教職員へのフィードバックアンケート実施

### ■出張等

・英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業シンポジューム
・大学教育学会第39回大会「教養教育の再考」
・第７回大学コンソーシアム八王子 FD フォーラム「三つのポリシーとその実質化を考える－教育の現場では何が変わるのか－」

## 図書・雑誌の案内

※これらの本は教育開発推進室で閲覧できます。貸出しを希望される方は、図書館で手続きを行ってください。

### ■定期購読雑誌等

「高等教育研究」
日本高等教育学科会編　玉川大学出版部発行

「IDE 現代の高等教育」 IDE 大学協会発行

「INTERNATIONAL REVIEW OF EDUCATION」
UNESCO INSTITUTE FOR LIFELONG LEARNING

## 編集後記

今年度も多くの方々のご協力により、無事、*FD Newsletter* をお届けすることができました。心よりお礼申し上げますとともに、内容に関するご意見、ご要望等も是非、委員会までお寄せいただければ幸いです。

今年度、本学では、原則全科目での授業アンケート（昨年度より）に加え、原則全科目を対象とした授業公開期間（教員相互に授業参観が可能な期間）の設定という、FD への取組の点でさらなる前進と言える企画を実現させました。また、単に授業の改善という狭い意味での FD ではなく、今号の特集《障害のある学生への支援》のように、大学を全ての学生にとって真に意味のある学びの場にするという大きな課題に、私たちは取り組んでいます。これからもこの *Newsletter* で、本学の努力の軌跡と収めた成果の一端をお伝えしていければと思います。

平成29年度教育開発・IR 委員会
足立耕平（委員長）　滝澤修身　大杉あゆみ　Jonathon O. Platt　坂本雅彦　細田美恵

長崎純心大学　教育開発・IR 委員会
〒852-8558 長崎市三ツ山町235番地　TEL095-846-0084　FAX095-849-1894　URL http://www.n-junshin.ac.jp/univ/